

第2章
千歳市の
景観特性

第2章 千歳市の景観特性

1. 千歳市の概要

千歳市は、北海道の中南部に位置し、札幌市・苫小牧市など4市4町に接しています。市域は東西に長く西高東低の地形です。市域の中央部はほぼ平坦な地形で、市街地をはじめ飛行場、自衛隊駐屯地、農用地などに利用されており、東部は畑作や稲作を中心とした農林業に利用されています。

また、西部の国立公園として指定されている支笏湖地区では、樽前山（1,041m）や恵庭岳（1,320m）など1,000m級の活火山が連なる山岳地帯を形成しています。

本市を流れる河川としては、千歳川水系の河川と安平川水系の美々川などがあり、西側の山地に支笏湖とオコタンペ湖、市街地南東側の美々川上流には千歳湖があります。

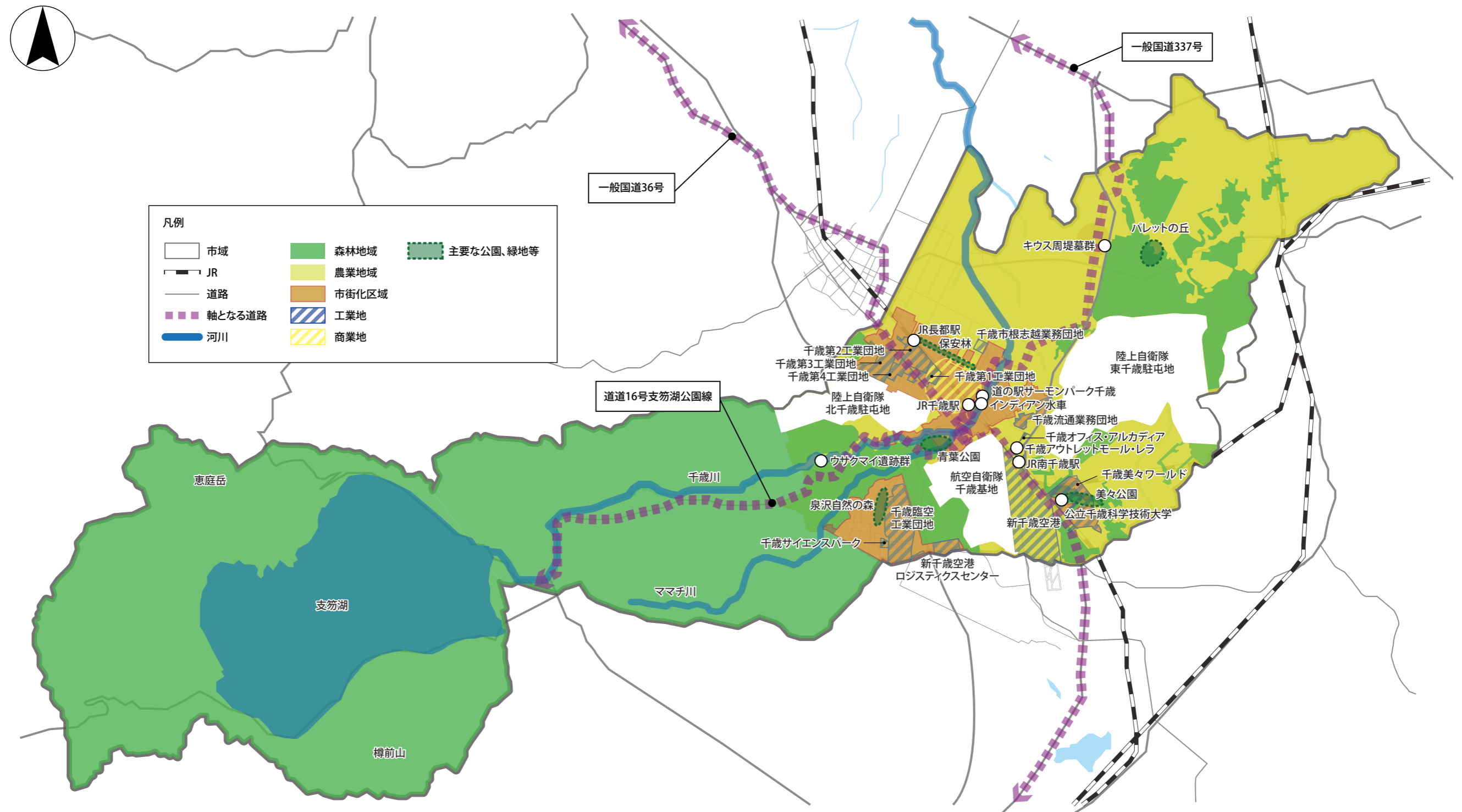
千歳市の気候は、太平洋と日本海の気象の影響を受ける分岐点に位置しており、夏季の最高気温は30度程度、年間の平均気温は7度から8度で、内陸型のしのぎやすい気候となっています。

また、梅雨や台風の影響も少なく年間の降水量は800mmから1,200mm程度で降雪量も道内で少ない地域です。

2. 千歳市の景観特性

千歳市の景観は、大きく支笏洞爺国立公園や国有林で構成される「自然景観」、東部の農業地域で構成される「田園景観」、国道36号を骨格としてつながる国道337号・道道支笏湖公園線、中央大通を中心に形成されている「都市景観」、史跡キウス周堤墓群に代表される「歴史・文化を形成する景観」に分けられます。

千歳市の景観特性を「自然・地形」、「田園」、「歴史・文化」、「都市構造・都市形成」、「市民の愛着」の5つの視点から整理します。



千歳市の景観特性図

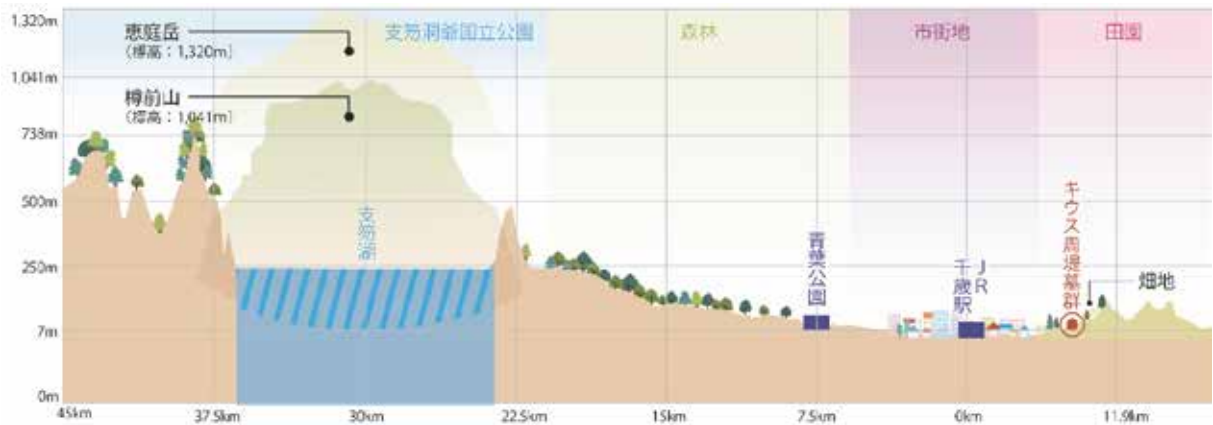
(1) 自然・地形における景観特性

1) 支笏洞爺国立公園に代表される自然景観

千歳市は、西部に原始的な自然につつまれた支笏洞爺国立公園、樽前山・恵庭岳などが連なる山岳地帯や国有林があります。

これらの自然環境が、四季折々の千歳らしい景観をつくる重要な要素となっており、雄大な自然景観をつくり出しているとともに、千歳市の観光資源となっています。

また、この自然景観は、青葉公園とつながっており、市街地のみどり豊かな景観づくりの重要な要素となっているほか、千歳市内から支笏湖へ向かう道道支笏湖公園線は、沿道の樹林によりみどりの回廊が形成され、印象的な景観となっています。



千歳市の地形断面

2) 自然資源（支笏湖・樽前山・恵庭岳）などの観光資源

千歳市の観光を SNS（インスタグラム）の投稿数で見ると、支笏洞爺国立公園に関する投稿が最も多く、次いで樽前山、千歳川、恵庭岳が投稿されており、こうした自然環境が観光資源となっていると言えます。



(2) 田園における景観特性

千歳市の東部にある農業地域では、丘陵地帯に小麦やてん菜、大豆などの生産が行われ、また、幌加地区にある美しい波状丘陵地帯は、パレットの丘と呼ばれており、秋には緑肥用として植えられたヒマワリが咲き、空と大地がおりなすコントラストがより一層美しい風景をつくり出しています。

農家の屋敷林や耕地防風林なども含め、飛行機から見える風景は、北海道らしさを感じることができるものとなっており、また、観光農園や収穫体験を提供する農園なども含め、四季折々の自然を体感できるこれらの豊かな田園景観が千歳市の観光資源となっています。



(3) 歴史・文化における景観特性

1) 先人たちの豊かな生活を残す風土

千歳は古くから自然の恩恵を受け、その地理的な背景を生かして人々が営みを続けてきました。川は魚たちや流域の草木、山間の動物たちを育み、先人の暮らしを豊かなものとしていました。江戸の時代にもサケは重要な水産資源として全国的に流通し、陸上交通が盛んになる以前、千歳は日本海と太平洋を結ぶ水上交通の拠点であり、水産物や木材などの物資が千歳川や美々川を往来していました。現代でも、千歳川で水遊びをし、釣り糸をたれた思い出や川を利用して生活していた様子は、長く千歳に住む人たちの原風景であり、観光資源としても貴重な支笏湖に代表される自然環境や市の東部に広がる田園景観は市民の心のよりどころとなっています。

2) 史跡キウス周堤墓群・史跡ウサクマイ遺跡群

石狩低地帯の特徴ある地理的・自然的環境のもと、千歳では後期旧石器時代から近世アイヌ文化期に至るまで、人々の集住が繰り返されてきました。



千歳市中央地区にある史跡キウス周堤墓群は、今から約 3,200 年前に造られた馬追丘陵西麓段丘上に立地する縄文文化最大級の構築物であり、周堤の外径が最大 83 m、くぼみ底面から周堤天端までの高さが最大で 4.7 m にも及ぶ大型のものを含む周堤墓が 9 基群集し、中には互いに周堤が接するものがあり、全体として広域な墓地の集合体を形成しており、これまでの調査により、立石を伴うものや石棒を副葬したもの、ベンガラを散布したものなど、埋葬の多様なあり方を示す土坑墓が良好に遺存していることが確認されています。

周堤墓群は、縄文期以降に火山灰や腐植土によって覆われますが、昭和初期に保護がなされ、構築時の外観を現地表でもそのまま確認することができ、周堤と中央部のくぼみ、及び相互の配置が作り出す地勢・地貌は、現在に至る史跡（遺跡）の形成過程を示すとともに、縄文時代の墓地群の有り様を反映させた史跡（遺跡）景観となっています。

ここでは、史跡としての、また世界遺産に登録された「北海道・北東北の縄文遺跡群」の構成資産としての遺跡景観を保全する取組が進められています。

千歳市蘭越地区にある史跡ウサクマイ遺跡群は、今から約 7,000 年前の縄文時代早期に内別川周辺に人々が暮らし始めたことで形成された遺跡群で、千歳川及び内別川の河岸段丘・台地上に所在する縄文時代早期から擦文文化期に至る 21 か所の遺跡からなり、原始河川のまま残されている内別川やカツラ、ミズナラ等の大木が生い茂る原生林など、個々の遺跡を取り巻く自然環境を含めた 146ha にも及ぶ広大な地域が指定地となって保存されています。

ここでは、縄文時代の遺跡が多い中、現地表に明瞭なくぼみを見せて密集する 75 基の竪穴住居跡は、道央部に遺された最大規模の擦文文化期集落跡として重要とされ、また、擦文期墓坑群から出土した蕨手刀、刀子、土器などの副葬品は、古代東北地方との文物交流を物語る具体的資料として、きわめて高く評価されています。

（4）都市構造・都市形成における景観特性

1) 新千歳空港

新千歳空港は、国際便も数多く就航する北海道の空の玄関口であり、新千歳空港及びその周辺は千歳市のみならず北海道を訪れる国内外の多くの人々の目にふれ、北海道を大きく印象付ける大切なエリアとなっています。

新千歳空港周辺から樽前山への眺望や北海道らしい広大な敷地は新千歳空港周辺の景観を構成する重要な要素となっているため、「新千歳空港アクセス沿道景観形成ガイドライン」に基づき、主に屋外広告物について適切に誘導し、空港周辺と調和した良好な景観づくりが行われています。



2) 中心市街地

千歳市の中心市街地は、個人商店等からなる7つの商店街振興組合等があり、商業施設や業務施設などの生活利便施設が集積し、また、グリーンベルトや千歳川などの自然環境も兼ね備えた地区となっています。

グリーンベルトや千歳川河畔では、毎年イベントなどが開催され多くの市民で賑わいを見せており、商店街と合わせ、水とみどりの調和した中心市街地の景観がつくられています。



3) 住宅地

千歳市の住宅地は、既存市街地に古くから存在する住宅地と、市街地の外縁部に計画的に整備された比較的新しい住宅地に分けられます。

市街地外縁部の計画的に整備された住宅地においては、広い敷地、広幅員の街路、宅地内の緑化などによって、ゆとりある良好な住環境をつくり出しています。

また、泉沢地区の特別分譲地は、臨森林型の住宅地としてみどり豊かで良好な住環境をつくり出しています。



4) 工業地

千歳市の工業地は、上長都、北信濃地区の内陸型工業地、泉沢、美々及び柏台南地区の多機能複合型工業地、流通、清流、柏台及び平和地区の流通業務地に分かれており、いずれも周辺や工業敷地内の緑地などにより、良好な景観を維持しています。

長都駅周辺と泉沢地区の工業地は、隣接する住宅地の住環境を保全するために敷地の周囲に緩衝緑地帯を整備し、工場内の緑地とあわせて、良好な環境をつくり出しています。

特に、泉沢の臨空工業団地では、工場立地法において設置が義務付けられる緑地面積が、工場敷地外の緑地をもって確保されており、みどり豊かな工業団地がつくられています。



5) 道路

千歳市は古くから交通の要衝であり、現在も新千歳空港を核として道内の主要都市を結ぶ広域的な道路体系、交通体系が整備されており、市道全般においては、豊富な街路樹や、真町泉沢大通などに代表される、既存のみどりを生かした道路整備によって、みどり豊かな沿道景観がつけられています。



また、新千歳空港周辺や国道36号、国道337号、道道千歳インター線などでは、北海道の空の玄関口として、来訪する方々へ「おもてなしの心」をあらわすために、2003年からシーニックバイウェイ活動の一つとして花植え活動が始まり、現在も彩りある沿道景観づくりの取り組みが行われています。

6) 河川・緑地

千歳市は、支笏湖を水源とする清流千歳川をはじめとする大小の河川が流れ、これらが市街地に水辺空間を形成し、河川沿いの緑地と合わせ、水とみどりの景観軸をつくり出しています。



また、青葉公園、グリーンベルト、街路樹、河畔の樹林など、多くのみどりが整備され、これらが良好な都市景観をつくり出しています。

千歳川沿いの河川敷地などは、市民や観光客の散策、休憩、イベントなどに活用されています。

(5) 市民の愛着における景観特性

小中学校の校歌には、その地域を代表する景観資源が入っていることが多く、千歳市内の小中学校の校歌を見ると「千歳川」「支笏湖」「石狩平野」、また「樽前山」や「恵庭岳」などの山並みやみどりなどを表現する言葉が歌われています。また「銀翼」「空の港」など空港を擁する千歳市ならではの資源も歌われています。



小中学校の校歌の歌詞から見るキーワード

川、水	支笏湖／千歳川／ママチ川／水清らか／清流 など
山岳	樽前山（煙）／恵庭岳／遠い山並み／名山の群／はるかな山 など
地形	石狩平野
空港	飛行場／銀翼／空の港

3. 千歳市の景観づくりに必要とされる事項

千歳市の景観特性を踏まえ、これからの千歳市の景観づくりに必要とされる事項を把握します。

(1) 都市イメージ・都市ブランドに寄与する景観づくり

千歳市のさらなる発展のためには豊かな自然環境や利便性の高い立地環境を生かした企業誘致や移住・定住を促進していくことが重要です。

企業誘致や移住・定住を促進するためには、そのまちのイメージが大切であり、景観が都市のイメージを構成する重要な要素となるため、千歳市の都市イメージ・都市ブランドに寄与する景観づくりを進める必要があります。

※都市ブランド：都市の魅力や個別資源など都市そのものの総体的な価値

(2) 北海道の空の玄関口としてのおもてなしの景観づくり

1) 新千歳空港を中心としたおもてなしの景観づくり

新千歳空港を擁する千歳市は、北海道の空の玄関口としての役割があります。

新千歳空港周辺は、北海道らしい広大な土地が広がっており、「新千歳空港アクセス沿道景観形成ガイドライン」に基づき、主に屋外広告物について適切に誘導し、空港周辺と調和した良好な景観づくりが行われています。

また、観光客の利用が多い新千歳空港周辺や道の駅サーモンパーク千歳では、樽前山の眺望やインディアン水車周辺の親水性に富んだ水辺など、良好な都市景観が作り出されており、公立千歳科学技術大学もまた、豊かな自然環境に囲まれた良好な景観をつくり出しています。

来訪者にとって北海道らしさを感じられる雄大な山並みや広がりがあり、豊かなみどりが際立つ景観づくりを継続し、北海道の空の玄関口としてのおもてなしの景観づくりを進める必要があります。

2) 観光に寄与する景観づくり

新千歳空港を擁する千歳市では、北海道の空の玄関口としての役割があり、外国人観光客の増加などにより、観光入込客数は増加傾向にあるものの、長期滞在や空港利用者を市内の回遊に十分結びつけることができていない状況が見られます。

千歳市には、支笏洞爺国立公園に代表される自然景観、サケの遡上が見られる千歳川やインディアン水車などの都市景観、パレットの丘に代表される東部の北海道らしい田園景観などの景観資源があることから、これらを活用し北海道の空の玄関口にふさわしい、観光に寄与する景観づくりを進める必要があります。

3) 千歳市の観光ルートを踏まえた沿道の景観づくり

千歳市の重要な観光資源である東部の農業地域や世界遺産に登録された史跡キウス周堤墓群、西部の支笏洞爺国立公園や周辺市町につながる沿道は、千歳市の観光ルートとなっています。

JR千歳駅や千歳市街地から道の駅サーモンパーク千歳や千歳川沿いを通り、史跡キウス周堤墓群周辺を通過する国道337号、千歳市街地から豊かな自然景観を通りながら支笏湖につながる道道支笏湖公園線、札幌市から千歳市街地を通り、新千歳空港につながる幹線道路である国道36号及び中央大通は特に重要な道路と言えることから、多様な観光資源をつなげる千歳市の観光ルートを踏まえた沿道の景観づくりを進める必要があります。

(3) 史跡キウス周堤墓群周辺などの保全につながる景観づくり

史跡キウス周堤墓群は、縄文時代の墓制・葬制を考える上で、欠くことのできない重要な遺跡であるため、世界遺産に登録された「北海道・北東北の縄文遺跡群」の価値の保全に向け、史跡とその周辺の緩衝地帯及び周辺の田園景観が一体となった景観づくりを進める必要があります。

また、史跡ウサクマイ遺跡群は、道央部に遺された最大規模の擦文文化期集落跡として重要とされており、北海道の歴史・文化を後世に伝えるため、史跡周辺の保全につながる景観づくりを進める必要があります。

(4) 豊かな自然を身近に感じられる景観づくり

豊かな自然と調和した都市景観を維持していくためには、自然を身近な存在として再認識し、街路樹や住宅地の庭、商業地の店先、工業地の敷地などにおけるみどりの維持・保全など、身近な景観を保全することが必要です。

高齢者や子育て世代など様々な世代からの市民ニーズを反映した魅力ある公園づくり、千歳川の水辺空間を生かした景観づくりを継続して進め、また、市民、事業者自らが自然と調和した生活環境の創出に取り組み、市民、事業者、市の協働で豊かな自然を身近に感じられる景観づくりを進める必要があります。

(5) 中心市街地の賑わいにつながる景観づくり

千歳市においては、JR千歳駅から駅前通を中心に商店街や商業施設などが集積し、グリーンベルトや千歳川などの水とみどりの調和した中心市街地がつくられており、人による様々な営みが行われる「まちの顔」として、賑わいの中心となっています。

その中でもJR千歳駅周辺は、多くの利用客が訪れる交通結節点であり、景観に配慮した建築物が建築されるなど、良好な景観づくりが進められています。

しかし、中心市街地の商店街では、車社会の定着やインターネットショッピング等による消費者の購買形態の変化や居住地区の拡大に伴う買い物環境の分散等により、空き店舗や遊休不動産が見られるほか、老朽化した住宅や店舗が多く、狭い歩行空間とあわせ、ゆとりがなく、市民や観光客にとって魅力を感じられない景観となっています。

JR千歳駅周辺を含む中心市街地は、「まちの顔」としての役割が期待されており、観光の活性化や交流人口の増加、人々のふれあいのある地域コミュニティの活性化のため、中心市街地の賑わいにつながる景観づくりを進める必要があります。

(6) 市民の愛着と誇りを育む景観づくり

千歳市には、支笏洞爺国立公園に代表される自然景観やパレットの丘に代表される東部の北海道らしい田園景観、世界遺産に登録された「北海道・北東北の縄文遺跡群」の構成資産の1つである史跡キウス周堤墓群、まちなかを流れる千歳川やインディアン水車など市民の誇りとなる景観資源があります。

市民のまちに対する愛着と誇りを育むため、こうした資源を市民、事業者、市の協働で保全し、また、子どもの頃から景観づくりに参加してもらう取り組みを行う必要があります。